

伝道ブックス
82

親鸞聖人と聖徳太子

織田顕祐

表紙デザイン 藤本孝明 + 如月舎

目次

■ 聖徳太子千四百回忌を前に……………	1
■ 三つの夢のお告げ……………	4
■ 日本における聖徳太子信仰……………	15
■ 聖徳太子の説話……………	18
■ 観音信仰の表れ……………	21
■ 「律令制」崩壊の中で……………	24
■ 信仰の広がり……………	26
■ 聖徳太子を讃える歌……………	28

■ 聖徳太子へのお願い	32
■ 聖徳太子に託した思い	36
■ 呼び名に込めた恩徳	38
■ 世俗の王であり仏さまとしての聖徳太子	41
■ 親鸞聖人のいただき方―父母として	45

あとがき

【凡例】

本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部）発行の『真宗聖典』を指します。

■ 聖徳太子千四百回忌を前に

京都にある大谷大学に奉職し、学生と一緒に仏教学を学んできました。その間ずっと私の課題になっているのは、親鸞聖人しんらんしょうにんがあきらかにされた「南無阿弥陀仏」の教えは、仏教学から見た時にどういうことになるのか。また日本の仏教は、インドから中国、朝鮮半島を経て伝えられてきたものですから、その大きな流れの中で親鸞聖人の教えは、どういうところに立っているのか、ということ です。

そういうことを思うにつけ、どうしても向き合わなければならぬのが、聖徳太子しょうとくたいしという方なのです。

親鸞聖人は、聖徳太子という方をどのようににただかれたのか、それ

が私の課題です。親鸞聖人は、歴史上の一人物として聖徳太子という方を受け止めたわけではなく、もっと大きなはたらきとして、太子を受け止めておられるのだと私は思っています。

ですから、聖徳太子という歴史上の人物をとおして、歴史を超えたような大きな存在としていただいていた日本のの仏教の歴史があると思うのです。そういうことをおさらいしながら、親鸞聖人が、太子をどのよう

に受け止められたのかを考えてみたいと思っています。

先日、インターネットで「聖徳太子」と検索して見ましたら、大阪のの四天王寺（してんのうじ）に法要の告知をする駒札（こまふだ）が立ったという記事を目にしました。

その札には、「平成三十四年厳修 聖徳太子千四百年御聖忌（ごせいぎ）」と書かれ

ていました。

歴史上の聖徳太子は、六二二年にお亡くなりになりましたので、そこから千四百年、二〇二二年が千四百年目にあたります。千四百回忌でいうと、一年前の二〇二一年がそれにあたります。ですから、二〇二一年、二〇二二年には、聖徳太子とゆかりのあるお寺で、大きな法要が勤まることになります。

ですから、私があらためて聖徳太子について考えていることをお話ししようと思うのは、そういう時代的な一つの流れもあるわけです。

■三つの夢のお告げ

宗祖親鸞聖人の生涯は、聖徳太子に導かれ、背中を押されながら歩んで行かれたということは、ご承知のことだろうと思います。

そのご生涯を少し尋ねてみますが、親鸞聖人が比叡山を下りられ、法然上人ねんしょうにんにお遇あいになる。そして流罪るざいとなり越後へ。その後、関東へ赴き、そして京都へ戻ってこられる。こういうご生涯の中で、節目節目に、その転機ごとに聖徳太子との出遇であいがあります。具体的に言いますと聖徳太子の夢のお告げ（夢告むこく）です。そういう出来事が親鸞聖人の行動をはじめ、生涯に影響を与えている。これは、間違いないことだと思うのです。

『三夢記』^{さんむき} という、書物というより書類のようなものが、高田派の本山に残っています。『三夢記』とは、字のごとく三つの夢を見られたということです。親鸞聖人が、聖徳太子との大事な三つの出遇い、夢を記録されたというわけです。これは、本当にそういう夢告を親鸞聖人が受けたかどうかということは、学者によっては疑わしいという意見をもっている方もいるのですが、それは置いておきまして、そこにどんなことが書いてあるのかを、少し紹介しておきたいと思えます。

最初の夢告は建久二けんきゆう（一一九二）年、親鸞聖人が十九歳の時です。聖人が、磯長しながという、聖徳太子の御廟ごびやうへ行かれた時にご覧になった夢です。